
甘味学園学生寮

一宮 秋臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘味学園学生寮

【Nコード】

N0621Z

【作者名】

一宮 秋臣

【あらすじ】

世界からスイーツが消えた!?

甘味戦争の終戦から五十年。国連により甘味規制法が制定されて以来、菓子は超高級品となってしまった。

その菓子を作る職人を育成する、日本でたった十校しかない、国立の菓子職人教育機関――甘味学園。全国から集められた選りすぐりのエリートが集う筈のその学園は、何故か変人奇人の巣窟だった!?

冒頭はシリアスっぽいですが、完全ギャグです。物語に出てく登場人物、ストーリーについては、作者実体験に基づく、ほぼノンフィクションにてお送りしています。

完全見切り発車ですが、お付き合い戴ける方は遠慮なくガンガン乗り込んで下さい。無賃乗車、大歓迎です。

甘味学園学生寮へようこそ！（前書き）

雨で暇だったんでアホ話始めました。（冷し中華始めました風に）
登場人物は名前こそ違いますが、実在の人物がモデルです。もしかしたら、貴方の傍にいたかもしれません。

甘味学園学生寮へようこそ！

甘いクレープ。芳醇なカカオの薫るチョコレート。さっぱりと酸味あるチーズケーキにふんわりとしたシュークリーム。

口どけ滑らかな水羊羹。とろけるようなみたらし団子。ひんやりと冷たいアイスクリーム。

幼い頃から、お菓子が大好きだった。

だから、思い返せば。

僕がこの道を選んだのも、半ば必然だったのだろう。

甘いものは正義だ。



「っちな……」

滴る汗を拭いながら、結城はうんざりとぼやいた。

真夏の太陽は、その威勢を誇るかのように、かんかんとした日差しで容赦なく地上を照らしている。八月の下旬に差し掛かってまだ衰えをみせない猛暑は、今週に入っても更に、今年最高気温を更新したばかりだ。

「くっそ、高地に来れば、少しは都内よりマシだと思ったのに……」

周囲を濃厚な緑に囲まれた景色は、都会ではなかなかお目にかかれないものだ。特に、地方に実家がない結城にとっては、鮮やかな木々の緑がよりいっそう新鮮に見える。

とはいえ、イコールでそれが暑さを軽減させてくれるかというと、そうでもなかった。確か今年は節電のため都内でもグリーンカーテンなるものが流行っていると聞いているが、これだけの量の植物を持ってしても、照りつける太陽には敵わないらしい。

「ていうか、別にカーテンになってるわけじゃないから、そこまで遮熱効果を期待しても無駄なんだよな」

植物には葉の蒸散による冷却効果があるらしいが、明らかに加熱にその能力が追いついていない。

「つーか、水気が多くて逆に蒸す……」

顎を伝う汗をシャツで拭き、ぱたぱたと扇ぐ。

それでもなんとか日差しから逃れようと、手でひさしを作り陽光を遮ってみるが。眩しさが軽減されたとはいえ、体感温度は欠片も変わらなかった。

「最近じゃもう、絶対日本の気候は温帯湿潤気候じゃなくて、亜熱帯に変わりつつあるよなあ」

真夏に時々都内で発生するゲリラ豪雨も、そう考えると寧ろスミーズに納得がいく。ようするにあればスコールだ。まさしく亜熱帯とかで発生している。

（ヤバい、死ぬ……）

阿呆な事を考えていると、冗談抜きに眩暈がしてきた。脱水症状を起こしては敵わない。慌ててペットボトルのお茶を煽る。疾うに温くなってはいたが、それでも水分が体中に染み渡ると、幾分体がマシになった気がした。

（危ない危ない。こんなところで倒れたら、マジで干からびるからな。せめてバス停までは行かないと）

氣力を奮い立たせて、歩みを開始する、駅からバス停までの距離は、徒歩で十分と書いてあった。十分ほどまでに十分は過ぎたが。

「ここで道間違っていましたー、とかだったらさすがに泣くな」

それでもめげずにえっちらおっちら進む事しばし。否、かなり。

「……どこが十分だよ」

駅から歩くこと約三十分。ようやく見つけたバス停を前に、結城は力なく地面にへたり込んだ。

とはいえ、折角目的地（に向かうための場所）についたというの

に、地べたにへたれている理由はない。第一、アスファルトの上は熱い。極めて理性的な思考の元に立ちあがり、バス停のベンチに腰掛ける。結城は結構リクエストだった。

バス停はただ野天にベンチがおいてあるだけのタイプではなく、風雨を凌ぐためか屋根と壁のある簡単な小屋のようなものだった。雨はともかく現状では風の恩恵は受けておきたいのだが、とりあえず日差しを防げる事実には、結城は感謝した。

幸運にも隣にあった自販機で新しく飲み物を買って、一気飲みする。喉を過ぎる清涼な冷たさに生き返る。

「ふう……行くまでに一苦労だな、こりゃ」

一休みしてから、バスの行き先と時刻表を確認する。幸いな事に、バス停は間違ってたなかった。

（ていうか、これで単純に迷子だったてんなら、いっそ笑えるけどな）

胸中で自虐気味に独りごちる。先のバスは逃してしまったようだが、どうやら二十分に一本は走っているらしい。よかった。二時間に一本だったらどうしようかと思った。

いくら都会っ子とはいえ、結城でも田舎の交通事情ぐらいは知っている。都内と違い、そう頻々に、バスや電車が走っていない事は、ここに来るまでの道中でしっかり学んでいた。まあ、実際のところ、ここまで便が悪かったのは、単に時期的なものもあるのだが。

これ以上の体力消費を避けるため、大人しくベンチに腰掛け本を読みながらバスを待つ。不意に強く風が吹き、結城は顔をあげた。

「お、来たか」

道の先に目を向けても、バスの影はおろかエンジン音さえ聞こえてこない。しかしこの時結城は、既に近づいてくる車の存在をはっきりと認識していた。

やがて。

結城が視線を向けた先から、バスがやってくる。乗客が一人もいないそのバスは、結城の待つバス停の前で止まった。

「よお、学生さん。乗るかい？」

乗車扉の奥で、運転手が親しげに声をかけてくる。都内なら間違ってもない光景に、結城もまた笑顔で答えた。

「乗ります」

自分の財産全てを詰め込んだトランクを重そうによっこらせと持ち上げようとすると、そんなこちらを見かねたのか、運転手の男性がわざわざ降りて手伝ってくれた。地方のバス会社はそんな事までしてくれるのか、と内心でその接客サービスに驚きはしたものの、助力がありがたい事は変わりない。頭を下げ、感謝を告げて荷物と一緒にバスに乗り込む。

「――で、お客さん。どちらまで？」

まるでタクシーのように行き先を訪ねてくる運転手の彼に。

「終点までお願いします」

結城は行き先の書かれた案内版を見つめながら答えた。

『甘味学園学生寮行き』

たった一人の乗客を乗せたバスは、終点に向けてのんびりと走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0621z/>

甘味学園学生寮

2011年12月2日16時50分発行